JADCI News

No.17

2000. 4. 1

The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

Office address:
Department of Biology,
Nihon University School of Medicine,
Itabashi-ku, Tokyo 173-8610

目　次：

頁

第12回日本比較免疫学会開催の案内 ------ 1
日本比較3学会合同シンポジウム開催の案内 ------ 1

「ニューミレニアムへの出発」　古田　恵美子 ----- 2

いつかリベンジならぬ、リチャレンジ　油井　聡 ------ 4

比較免疫学会と私　中村　弘明 ------ 6

事務局より（所属変更時の通知依頼／会費納入願い（払込用紙を間違えないように））
---------- 8
会員名簿追加・変更 ---------- 8
新会員の入会を歓迎いたします（入会申込書）---------- 9

発行者：　日本比較免疫学会会長　古田恵美子

事務局：　庶務・会計　田中邦男
補助役員　大竹伸一　阿部健之
住所：〒173-8610
東京都板橋区大谷口上町30-1
日本大学医学部生物学教室内
事務局 e-mail：jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp
電話：03-3972-8111　内線2291（生物学教室）
Fax.：03-3972-0027（医学部庶務課扱い）
郵便振替：　口座番号00120-4-　18034
加入者名　JADCI

この冊子は100%再生紙を使用しました。

第12回日本比較免疫学会学術集会開催の案内

期　日：8月23日（水）～25日（金）
場　所：ホテル聚楽（お茶の水）

参加申し込み〆切：　5月27日（土）
尚、当日参加も歓迎します。

同封の『学術集会開催について』を御参照下さい。
広い分野、領域から、多数の御参加をお待ち致しております。

学術集会長：　茂呂　周
（日本大学歯学部病理学教室）

日本比較3学会の合同シンポジウム開催のご案内

（比較3学会シンポ企画推進委員：和合　治久）

標記の合同シンポジウムを第1回目の本年度は日本比較生理生化学会の会期に合わせて下記の日程で開催致します。このシンポジウムは日本比較免疫学会、日本比較生理生化学会、日本比較内分泌学会の3つの学会が共通するテーマで生物の「比較」という概念と研究手段を通して、相互の学問領域の理解と交流を深めるために企画されたものです。会員の皆様の積極的なご参加を宜しく御願い申し上げます。

1）開催日時：平成１２年８月３日午後２時２０分－５時２０分
2）場所：山口大学大学会館（山口市吉田１６７７－１）
3）テーマ「防御戦略の比較生物学」

＊シンポジストとしては、急なことでしたので JADCI からは古田恵美子先生と和合治久が第1回目を務めることに致しました。

「ニューミレニアムへの出発」

獨協医科大学
古田恵美子

立春はとうに過ぎましたのに，この所の寒さはひときわ身にしみ，縮み上る毎日です。
通勤の電車の窓から，真っ白な富士山や遠くにかすむ浅間山や大きく眼前に迫まる日光の男体山を毎日見ることが出来て，遠距離通勤も苦になりません。

1999年12月末，日本大学の田中先生から選挙速報が入りました。「会長再任」のお知らせで，大変光栄に感じるとともに，さてまたずしりと重さを感じました。私ごときに何が出来るかと前途はまっ暗なのですが，幸いにして私の周りには，本当に心暖かく有能な先生方が実に沢山いらっしゃって下さるおかげで，今までも何とかやって参ることが出来ました。これからも，おんぶされたり，だっこされたりしながら，がんばって「何か」をして見ようと決心致しました。

今世界は環境汚染という生命体にとって，大変事が起きつつあります。NHKのニュースで「ウミウ」に甲状腺の変性が見られ，またすでに製造中止となっている水銀製剤やDDTその他の化学物質が，高濃度に肝臓に蓄積されていると報ぜられていました。このことが「ウミウ」の大量死につながっているとのことでした。
北海のアザラシの大量死は，すでに60年代から一部の研究者によって問題とされていました。この大型野生動物の死のプロセスは，だからといって論ぜられた訳ではありません。おそらく，汚染物質によって，免疫系，例えばマクロファージの不活化やその他の一連の免疫システムの破綻による死であったと考えられます。しかしながら，私どもは自然界に起った異常を動物の死としてしかとらえることが出来ませんでした。そのプロセスは何なのか解析することは大変困難でした。何故ならば，その問題の動物はもう「死」の状態でしか発見されなかったからです。

五，六年前のことです。私の居住する埼玉県のU市で，一晩に大量の昆虫が死んで，道路といわず公園といわず，虫の死骸の山が出来ました。勿論，住民は大さわぎして．何故死んだのか原因をつきとめて欲しい旨市に要請しました。その解答はなかったと記憶しております。そしてその後，所沢市のダイオキシン騒動です。U市の事件がダイオキシンと関係があったかどうか，今となってはわかりませんが，その時，当局が重大視してくれていたら，その後の何かの役には立ったのではないでしょうか。
地球汚染物質が，生命体をいかに撹乱しているのかは，今までのところ厳密に調査研究されてはいません。

頂度一年前，環境研のK先生から，下等生物での「汚染物質と免疫系」の調査研究プロジェクトを作りませんかとのご提案がありました。これこそ，私ども比較免疫学の分野を研究している者にとって，重要な一課題なのではないかと考え，お仲間に加えていただきました。

20世紀は，戦争の世紀であったと云われています。そして戦争は科学の分野を大きく前進させ，一部の人間を豊かに致しました。得たものも大きかったと同時に，失ったものも少なくありません。そのマイナスのツケが今新しい世紀に運び込まれようとしています。「地球の未来の為」などと大それたことを云うつもりはありませんが，せめて，そのツケの一部でも，私どもの力で支払うことが出来たらと考えております。一人一人の力ではナメクジの歩みです。比較免疫学者が手をたづさえて，今こそ「何か」をしていけたらと考える今日この頃です。

2000年3月10日

いつかリベンジならぬ、リチャレンジ

帝京大学薬学部薬品化学教室
油井 聡

まずこの場にふさわしくない情けない告白から始めます。実は私、最後に参加させて頂いた比較免疫学会集会は確か、東京医科歯科大での会でしたから、何年前でしたでしょうか。それでも一番新しい会員名簿には、当時と同じで専門分野がマクロファージの増殖研究となっています。すっかり幽霊会員と化してしまい、申し訳ない気持ちで一杯です。盗人にも三分の理かもしれませんが、今の気持ちを書かせてください。

帝京大にお世話になりましたのが 1982 年です。以来、約 10 年間は山崎教授のもとマクロファージの増殖研究にたずさわってきました。マクロファージの増殖因子は、哺乳動物ではマクロファージコロニー刺激因子と顆粒球・マクロファージコロニー刺激因子の 2 大蛋白因子が知られています。私は当時、腹水癌でふくれたマウスの腹水の中に含まれるマクロファージ増殖因子の精製というテーマを与えられ、いろいろ検討していますうちに、それが沸騰水浴中でぐらぐら煮ても失活しない活性を含むことを見出しました。それが上記 2 大因子でなく、マクロファージが日頃貪食清掃しているに違いない死細胞や変性リポタンパク質に含まれる脂質成分であることが分かり、佐々木君(現感染研)や他の人たちと、動脈硬化の悪玉である酸化 LDL でも増殖がいくということを見出すことになったのは振り返れば短い時間でした。

マクロファージの貪食物でその増殖が誘起される。これはサイトカイン等難しい伝達調節因子がまだ登場する以前に行われていたマクロファージ増殖の調節システムの姿ではないか。この命題を証明するには、比較免疫学的検討以外に何があろう。私なりの試みもやってみました。細胞性粘菌アメーバーに脂質を加えたり、和合先生からカイコの血球細胞の取り方を教えていただいたり、古田先生からナメクジのマクロファージの培養を教えていただいたり、朝、山崎先生が出勤途中にある金魚屋から調達した金魚を氷の上でさばいたり。しかし、いずれの試みも、培養系を定着させることさえ出来ず、何がなんだか分からぬまま終わってしまいました。その時に痛感したのは、私なりの試みでは駄目で、当時、流行っていた言葉で、「ほとんど病気」と言うくらいにやらねば

こうした新しいことはできないんだなということでした(当時の流行語大賞に比べ、去年の「リベンジ」なんて何とインパクトがないことでしょう。)。

多分私が山崎先生のお供をして、古田先生の研究室でのキリタンポ鍋を囲む会に何度も参加させていただき、隅っこでおとなしくしていたことになったのは、こうした経緯からです。その会で、昔はマウスのリンパ球の無菌培養だって難しく、今のように苦労なくできるようになったのはやっぱり先人の方の大変な苦労があったからだというお話を聞かされ、自分がやってることが恥ずかしくなったのを覚えています。その後、マクロファージが貪食物で増殖するには、内在性の顆粒球・マクロファージコロニー刺激因子の産生が必須であるということが分かり、自然と比較免疫学会からは足が遠のいてしまいました。

*　　*　　*　　*　　*

マクロファージ増殖を検討しているときに、偶然、好中球の破砕物がいろいろな細胞の増殖を完全に阻害する因子を含むことを見つけました。精製してみますと、新規物質ではなかったのですが、カルプロテクチン(またの名をMRP8/14と言います。)というタンパク質であると分かりました。炎症で一過性に上昇する炎症性タンパク質で、好中球の細胞質タンパク質の50% を占める豊富なタンパク質です。マクロファージももっており、貪食細胞に特異的に発現することが知られています。この蛋白は、癌細胞や正常線維芽細胞にアポトーシスを誘導することが分かりました。構造的にはS100ファミリーに属するカルシウム結合タンパク質で、これらはカルモジュリンと異なり、ある限られた細胞種に、その分化段階に伴って発現する特徴があるそうです。

そこで、このタンパク質が貪食細胞に特異的ならば、その分化や寿命にどんな関係があるか、自分たちの見出したアポトーシス誘導能や、増殖抑制能とからめて考えたくなるのは人情というものです。そこで、やはり、このものは進化の上でいつごろ出現したのだろうか、また、哺乳類以外でも貪食細胞特異的なのかという疑問が沸いてきます。今、私はカルプロテクチンのアポトーシス誘導メカニズムの検討にかかっており、余裕がありませんが、いつか比較免疫学的にリベンジ(いやリベンジはヒトを対象とした'復讐'の意味で、やっぱりしっくりしない言葉ですから、リチャレンジと言いなおします。)したい、そのときは、ほとんど病気状態でやらねば、などと思っています。早く幽霊会員状態から脱けだそう、そう思っています。

比較免疫学会と私

東京歯科大学生物学研究室
中村弘明

私と比較免疫学会のかかわりの発端は、友永先生の呼びかけで開かれた、シンポジウム"Evolution and Differentiation of the Immune System"（宇部市）にまで遡ることができます。当時、獨協医科大学第２解剖学教室にいた私は、現会長の古田先生とともにそのシンポジウムに参加したのでした。1988年1月30日のことでした。友永先生をはじめとしてほとんどすべて 初対面の方ばかり。鋭い眼光の剣豪宮本武蔵のような方、これが友永先生に対する私の第一印象です。後になって、この先生と酒を酌み交わし、鼻メガネ越しの眼が、意外とやさしいことを知ることになろうとは、そのときは予想だにしないことでした。特別講演で"Comparative Immunology" と題した口演をされたCooper 先生とも、もちろん初対面でした。私は拙い英語で、「メダカの移植片拒絶について」の発表をしましたが、Cooper先生は休憩時間のときに、色々と励ましてくれたことを思い出します。とにかく緊張したシンポジウムを終えて、懇親会の料理（私の記憶が確かならば、大皿にはアメリカザリガニが盛られていた）にもほとんど手をつけずに、古田先生と逃げ出すように岡山の先輩宅に向けて、タクシーを飛ばしたのでした。

しかし、縁とは奇なもので、宇部から戻って間もなくのこと、古田先生と友永先生が、要旨のことか何かで電話連絡しているうちに、近く帰国する Cooper 先生を、関東にいる有志で、東京から成田までお送りしようと言う話が出来上がり、古田先生以下数名に加わって、私も東京で再び Cooper 先生とお目にかかることとなったのでした。成田に行く前に、都内でザリガニより美味しい昼食をと、古田先生が予約しておいたレストランで、我々は Cooper 先生を囲んで歓談し、私は英会話に笑顔を引きつらせながらも、楽しいひと時を過ごしたのでした。その席で、Cooper先生は、ISDCI Congressを是非 日本で開催するよう力説され、加えて、同行していた当時農水省のM氏が、なんだかとても楽観的な大風呂敷を広げてくれたので、その日から古田先生は、日本でのＩＳＤＣＩ会議開催へ向けて、暗中模索（猪突猛進）の日々を送ることとなっていったのでした。当然私にも、それをバックアップする毎日が訪れたというわけです。今考えると、無謀とも思えることですが、それから間もなく、古田先生と私は、ＩＳＤＣＩ開催地（施設）を求めて、現地調査に乗り出したのでした。かくして第１の候補地だったつくば市周辺では、農技研などをたずねてまわる、おかしな二人連れが見られるようになったのでした。

しかし、実績の無いところで国際会議が開催できるわけでもありませんので、まずは日本での開催母体となる組織（団体）の設立を、ということで、ことは動き出しました。その後

の経緯は、皆様ご承知のように、動物学会のサテライトシンポジウムの形で開催されていた比較免疫シンポジウムを発展的解消ということで、独立した日本比較免疫学研究会が発足(1989年)されたわけです。当時70余名いたシンポジウムの会員を比較免疫学研究会が引き継ぎ、さらに新入会員を募りました。初代の事務局が獨協医科大学第2解剖学教室になったことは、上記の事情から当然の成り行きでした。研究会(後に学会)の名称も自然の流れで、ＪＡＤＣＩと決まったように記憶します。村松繁先生には、晴天の霹靂の思いで、初代会長をお引き受けいただくことになりました。

右も左もわからぬまま、事務局の一員として、第1回の学術集会の準備をした時のことは、今でも懐かしく思い出されます。学術集会そのものも盛会でしたが、何より講演会場の隣の休憩室に用意した、アルコール類が、大変喜ばれました。それもそのはず、その後、この学会のお陰で、多くのすばらしい方々とお知り合いになれましたが、本会員の多くは、虫好き・魚好き・ホヤ好き・ナメクジ好き・・・などの多様性(diversity)とともに、酒好きと言う共通性(unity)を持っているのです。以来私は密かに、ＪＡＤＣＩを、Japanese Alcohol Drinker`s Congress for Interest と読みなしております。

1997年に、東京歯科大学に来て以来、事務局の仕事から解放されていましたが、今年からプログラム委員ということで、小林さん(感染研)・山口さん(獨協)とともに、仕事をさせていただくことになりました。長い間、この大変な委員の役をほとんど一手に引き受けてくれていた、和合先生を少しでも見習って、微力を尽くしたいと思っております。

宇部のシンポジウム・・・そこから帰って間もなくの古田先生と友永先生の電話・・・Cooper先生を成田までお送りするという出来事・・・など、ごく些細なことの重なりが、現在に繋がっています。

宇部でザリガニをゆっくり味わっていれば、私にとってはまた違った人生があったのかもしれません。しかし、それを想像することは時間の無駄と言うものでしょう。プログラム委員としての初仕事に精を出したいと思います。

事務局より

☞ **所属変更時の通知依頼**

News 等の送付に宅配便を利用しております。転送は出来ませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡下さい。

☞ **会費納入願い**

平成 12 年（2000 年）度分の会費（3,000 円）の納入をお願いいたします。

年会費の払込は、同封の加入者名「JADCI」の払込用紙をご使用下さい。

学術集会参加費等の払込は、**加入者名「日本比較免疫学会第 12 回学術集会」**の払込用紙をご使用下さい。

くれぐれもお間違えなきよう宜しくお願いいたします。

会員名簿（1999 年 7 月 12 日）追加・変更（その 2）

追加（新入会）

栗林　景容　KURIBAYASHI KAGEMASA
1) 〒514-8507　津市江戸橋 2-174
2) 三重大学医学部生体防御医学講座
3) TEL. 059-231-5037
FAX. 059-231-5225
E-mail. keiyo@doc.medic.mie-u.ac.jp
4) 免疫学

佐々木　由利　SASAKI YURI
1) 〒160-8402　東京都新宿区新宿 6-1-1
2) 東京医科大学生物学教室
3) TEL. 03-3351-6141 (内) 254
FAX. 03-3351-3976
E-mail. yuri-s@tokyo-med.ac.jp
4) (下等動物の形態組織)、軟体動物の生体防御

所属等の変更

杵渕　みゆき　KINEBUCHI MIYUKI
1) 〒500-8705　岐阜市司町 40
2) 岐阜大学医学部病理学第 2 講座
3) TEL. 058-265-1241
4) 分子病理学

中西　照幸　NAKANISHI TERUYUKI
1) 〒252-8570　神奈川県藤沢市亀井野 1866
2) 日本大学生物資源科学部
獣医学科魚病学研究室
3) TEL. 0466-84-3632
FAX. 0466-84-3632
E-mail. tnakanis@brs.nihon-u.ac.jp
4) 魚類免疫学

田村　栄光　TAMURA EIMITSU
1) 〒950-0852　新潟市石山 3 丁目 4-37 (自宅)
2) （前）新潟市立沼垂高校
3) TEL. 025p-286-1283
4) 魚類・器官組織・胸腺活動と内分泌系のかかわり

横尾　暢哉　YOKOO SHINYA
1) 〒480-1131　愛知郡長久手町長湫南小井堀 27
エクセル川本 II-6B (自宅)
2) （前）佐賀大学農学部害虫制御学教室
3)
4) 昆虫寄生性線虫による昆虫体液の生体防御反応の抑制

新会員の入会を歓迎いたします。下記入会申込書をコピーしてご利用下さい。
入会金不要、年会費 3,000 円（平成 12 年 4 月現在）　*入会申し込み頂ければ*
送付先：日本比較免疫学会（JADCI）事務局　*振替用紙をお送りいたします*
〒173-8610　板橋区大谷口上町 30-1　日本大学医学部生物学教室内
（問合せは　TEL: 03-3972-8111（内）2291　または
e-mail address: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp　に願います）

入　会　申　込　書

このたび日本比較免疫学会に入会したく、下記の通り申し込みます。

年　　月　　日

日本比較免疫学会
会長　古田恵美子殿

氏　名 _____

同ﾛｰﾏ字 _____

所　属 _____

_____

記

会員種別：個人会員

連絡先：（〒　　－　　）（所属先・自宅　一方を○で囲む）

_____

_____

_____

TEL: _____　内線 _____

FAX: _____

e-mail address: _____

専門分野：_____

_____